

## イノベーションのコーチ？

### ■スポーツの世界では

日本出身力士が10年ぶりに優勝！ なんとめでたい話であります。

相撲は国技であるからして、日本出身横綱がないのも、優勝者が10年も出ないことも寂しい限りでした。（注：実際には、国技として国が認めた事実は有りません。）

琴奨菊は昨年、小柄な祐未さんと結婚して、好い所を見せようということでヤル気スイッチが入ったんだろうと考えていました。

1月25日のNHKのテレビ放送を見てましたら、琴奨菊は去年8月から、トレーナーの指導よろしきを得て、重りを詰めたタイヤを砂利の上で押ししたり、やかんのような形のダンベルを持ち上げたりして、筋力強化トレーニングなど、体幹を鍛えるトレーニングを続けていたとのことでした。ぶつかり稽古、鉄砲、摺り足、四股等だけでは、海外出身の体格、身体能力には勝てなかった。海外出身の体格差がある人等に勝つには、その人たちと同じ訓練をするではダメで、カバーする手立てが必要だったということになります。それを気付かせ、本人が納得の上で、実践させるコーチが必要だったと考えられます。

相撲の場合、日本固有の国技、歴史があり、これまでの練習方法と違う方法を行うには、それなりの決断が必要だったと推測されます。今回の優勝をきっかけに相撲界も変わっていくのだろうと考えています。

そう言えば、テニスの錦織にマイケル・チャン、日本のラグビーにエディー・ジョーンズ、羽生結弦にブライアン・オーサーというように、世界で活躍するにはそれなりの指導者がおられました。

### ■産業界(イノベーション)の場合は

名選手必ずしも名監督ならず。

これはスポーツ界に限らず、産業界でも言えることではないでしょうか。昔は背中教えることもできたのですが、グローバル化して、環境変化の速い今は、往年の名選手であればあるほど自らの成功体験が邪魔をして、個々の選手の長所、短所の見極め、育成手法の考察ができないのではないのでしょうか。

江戸時代後期、米沢藩主の上杉鷹山が家臣に言い聞かせた「為せば成る、為さねば成らぬ何事も、成らぬは人の為さぬなりけり」ということわざがあります。根性論で、やみ雲に取り組んだとして、成らぬもの成りません。

話は変わりますが、最近、漸く、オープン・イノベーションの取り組みに腰が入ってきたようだとはよく耳にします。その一方で、イノベーション推進を任された中間管理職はどうしたら良いか、先例もなく、困っているとも聞きます。先例が無いからイノベーションなのですが、イノベーションにも理論があり、成し遂げるための環境づくりが必要でしょう。そのためのコーチが必要だと考えられます。企業あるいは事業に合ったコーチは中々、

見つからないでしょうし、たとえ見つかったところで、経営陣がその人にコーチをお願いするかと言えば、それも難しいでしょう。また、上杉鷹山が出てきて「為せば成る」と言われるのかもしれませんが。

ならば、どうするか。

高校野球の女子マネージャーに倣って、もしドラの『マネジメント』に加えて『イノベーションと企業家精神』でも読んでイノベーション創出の取り組みを始めるしかないのが現実かと思えてきます。

孤立無援の様に思えるオープン・イノベーションの担当の皆様

安心してください。

公的研究機関、大学や産業支援機関の産官学の連携を推進しておられる方々が、相談に乗ってくださると思います。門を叩いて見ては如何ですか。少なくとも、話をすることで精神的に楽になると思います。